館長室の窓から⑮

秋の詩によせて

図書館長　佐藤 真一

青空が澄んで深みを増し、窓辺にそよ風がわたる季節を迎えると、思い起こす一編の詩がある。八木重吉の「素朴な琴」と題する詩である。

この明るさのなかへ
ひとつの素朴な琴をおけば
秋の美しさに耐えかね
琴はしずかに鳴りいだすだろう

名高い欧米の詩や現代の詩に接しても、心に深く染み入るものはなかなか見つからない。そんななかで、重吉の詩は際立っている。

「あかるい秋がやってきた／しずかな障子のそばへすりよって／おとなしい子供のように／じっとあたりのけはいをたのしんでいたい」（「障子」）

「はっきりと／もう秋だなとおもうころは／色色なものが好きになってくる／あかるい日なぞ／大きな木のそばへ行っていたいきがする」（「木」）

「きょねんは／水のおとがうれしかった／おととしは／空がうれしかった／ことしの秋は／まっ赤なさくらの葉がうれしい」（「三つの秋」）

詩人にとって秋は特別な季節のようだ。重吉自身がそのことをメモに書き残している。「すべての季節は、秋を、つくり出さんがための過程（プロセス）とも、みえる。わたくしの、あらゆる、努力は、心の秋に、味到せんための、くるしみともみえる」。（「キーツに捧ぐ」）

「秋になると／ふとしたことまでうれしくなる／そこいらを歩きながら／うっかり路をまちがえてきづいた時なぞ／なんだか　ころころうれしくなる」（「秋」）

図書館のう・ご・き

◇本棚「今月の栞」について

今年の2月初め、図書館長からこの企画のご提案がありました。図書館としてはその企画に大賛成、とはいえ、執筆していただくのは先生方ですので、先生方のご協力がなければ実現しません。ということで、早速、6月の図書館委員会で検討していただきました。

図書館委員会の先生方にも大賛成をいただき、その後、夏休み前の教授会で館長から執筆協力の要請をさせていただきました。そんな経緯を経て、この9月から図書館のホームページと参考図書室内に、本棚「今月の栞」コーナーを開設することができたのです。

第1回目の9月は、言いだしっぺの図書館長である佐藤真一先生（歴史）と中西千春先生（英語）からの大切な1冊の紹介です。

ここに、教授会で要請したときの、佐藤館長のこの「今月の栞」への思いを紹介させていただきます。

図書館では、学生たちにもっと本に親しんでもらえるよう、9月から、本棚<今月の栞>という新企画を始めたいと考えています。感銘を受けた本、思い出の本、人生の方向を見出した本、あるいはまた最近出会って印象に残った本など、是非ご紹介ください。この本棚<今月の栞>を、開架図書のほとんどない本学図書館のささやかな本との出会いの場、先生方のさまざまな思いを学生に伝える場にしていくことができたら、と思っています。

主任司書　松浦淳子